

常不軽菩薩の生き方に切り替えよう

【11月12月度の御金言】仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に、出世の本懐を遂げ給う。其の中の大難申す計りなし。先々に申すがごとし。余は二十七年なり。其の間の大難は各々かつしろしめせり。【聖人御難事】(全集1189頁)

法華講信条

- 1,謗法嚴戒の信仰を貫こう。(信心)
- 1,行学絶へなば仏法はあるべからず。(行学)
- 1,ただ一言でも妙法を伝える勇気を持とう。(破邪顯正)
- 1,どんなことがあっても憶持不忘の信心を貫こう。
- 1,現世利益絶対否定の信心をしよう。(示教利喜)
- 1,成仏大願、菩提心堅固の精進をしよう。
- 1,御題目を唱える為にこそ生まれてきた自覚を持とう。
- 1,噂に流されない、人に媚びへづらわない自立した信心をしよう。
- 1,妙法聞法の縁を大切に求道の信心をしよう。

1991年2月13日掲揚

☆ 現世利益絶対否定の信心をしよう。(示教利喜)

上野殿御返事(全1546p)

此の南無妙法蓮華經に【余事】をまじへばゆゆしきひが事なり

上野殿御消息(全1528p)

此の法華經を強く信じまいらせて【余念】なく一筋に信仰する者をば影の身にそふが如く守らせ給ひ候なり。

日蓮大聖人はこの様に説示されています。つまり、この南無妙法蓮華經の法を
【余事余念無く信心無二に南無妙法蓮華經と唱え】

と、私達信仰者に言われているのであります。説明するまでもありませんが【余事】とは、御題目を唱えている時に、携帯電話をいじったり、線香の灰をならしたり、御経机のほこりを払ったり、炊飯器のスイッチを入れてくれとか、宿題やつときなさいよと声を掛けたり、電話に出て長話したり等々の事であります。【余念】は、御題目以外の事を考えたり、自分の願い事を思い続けたり、何か仕事や生活の中で、良いアイデアが仏智としてひらめくようにして頂けないかと、頭の中で、ああでもないこうでもないと雑念の海を漂うようにウロウロと考える等々であります。【余事】をすれば、当然【余念】になりますから同じものと言えます。つまり、日蓮大聖人は、【南無妙法蓮華經】と、信じ唱える時には、【南無妙法蓮華經】だけを心に念じて、心も一緒に【南無妙法蓮華經】と唱えなさいと言っているのであります。そうすれば、正しい【南無妙法蓮華經】の法味として法華經守護の諸天善神も、正しく理解し受け入れ、法華經の行者として認め、影の身を添うが如く、私達凡夫がああだこうだと考えなくとも守護してくれる。と示されているのであります。当然、心が【余事】【余念】だらけでは、【南無妙法蓮華經】の法味にはならないのであります。現世利益目的の【南無妙法蓮華經】も【余事】【余念】まみれなのであります。【現世利益】まみれ【余事】【余念】まみれの【南無妙法蓮華經】の唱題をやめて、心も

【南無妙法蓮華經】声も【南無妙法蓮華經】の至極当たり前の【南無妙法蓮華經】を唱える様に心懸け心懸け努力して下さい。創価学会の時に洗脳され心の芯まで染められた、自分の願い事を思い続け、沢山御題目を唱える事が唱題だという考え方を、自分で打ち碎いて改めて、一回一回の南無妙法蓮華經を【口】も【意（心）】も一緒に南無妙法蓮華經と念ずる正しい唱題に戻す努力をして下さい。